

口永良部島の火山活動解説資料（平成 22 年 9 月）

福岡管区气象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方气象台

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。ただし、火口内では引き続き噴気がみられており、火山灰等の噴出する可能性があります。また、火口付近では火山ガスに対する注意が必要です。

平成 21 年 10 月 30 日に噴火予報（噴火警戒レベル 1、平常）を発表しました。その後、予報警報事項に変更はありません。

○ 9 月の活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図 1、図 5～10）

新岳の噴煙活動は低調で、噴煙の高さは火口縁上概ね 100m（最高高度は 200m）で経過しました。

14～17 日に実施した現地調査では、新岳南側火口壁の上部に直径 3.5m の噴気孔が形成されているのを確認しました。同噴気孔付近の最高温度は、227℃と前回（2010 年 2 月 24 日：144℃）の観測と比べて上昇しており、噴気の勢いも強くなっていました。古岳では前回（2009 年 5 月）確認された噴気孔は熱水に満たされ、中央部に噴湯を確認しました。

・地震や微動の発生状況（図 1、図 3）

火山性地震は少ない状態で経過しました。月回数は 24 回（8 月：16 回）でした。震源は新岳火口直下のごく浅いところで、これまでと比べて変化はありませんでした。

火山性微動の月回数は 33 回（8 月：19 回）で、前期間と比べて変化はありませんでした。

・地殻変動の状況（図 1、図 2、図 11）

GPS 連続観測では、火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。また、16～17 日にかけて実施した GPS 繰り返し観測でも、山体の膨張を示す変化は認められませんでした。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 22 年 10 月分）は平成 22 年 11 月 9 日に発表する予定です。

※この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学及び独立行政法人産業技術総合研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平 20 業使、第 385 号）。

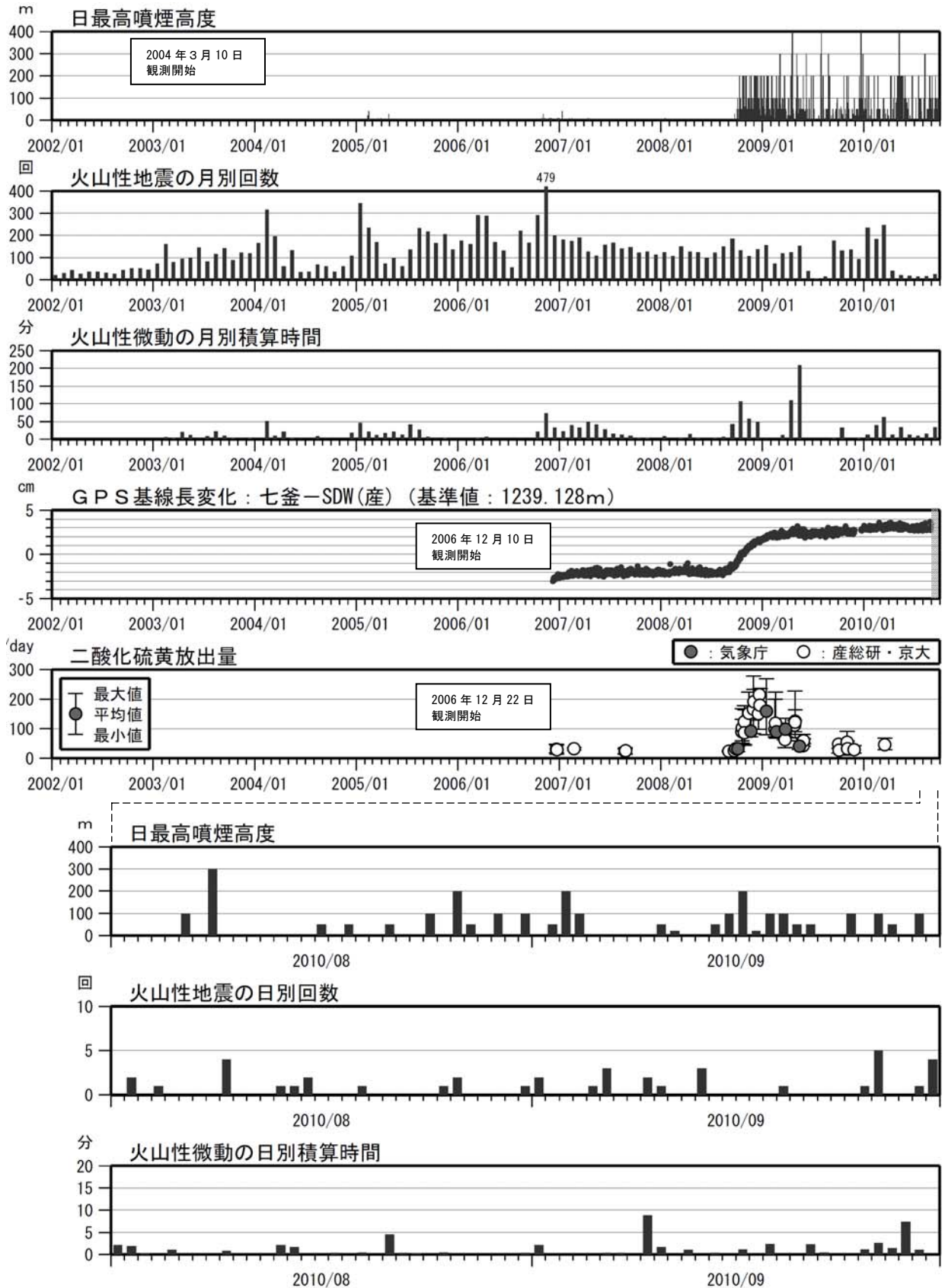


図 1※ 口永良部島 火山活動経過図（2002 年 1 月～2010 年 9 月）

< 9 月の状況 >

- ・ 噴煙活動は低調で、噴煙の高さは火口縁上概ね 100m（最高高度は 200m）で経過しました。
 - ・ 火山性地震は少ない状態で経過しました。月回数は 24 回（8 月：16 回）でした。
 - ・ 火山性微動の月回数は 33 回（8 月：19 回）で、前期間と比べて変化はありませんでした。
- 灰色部分は観測点障害のため欠測。

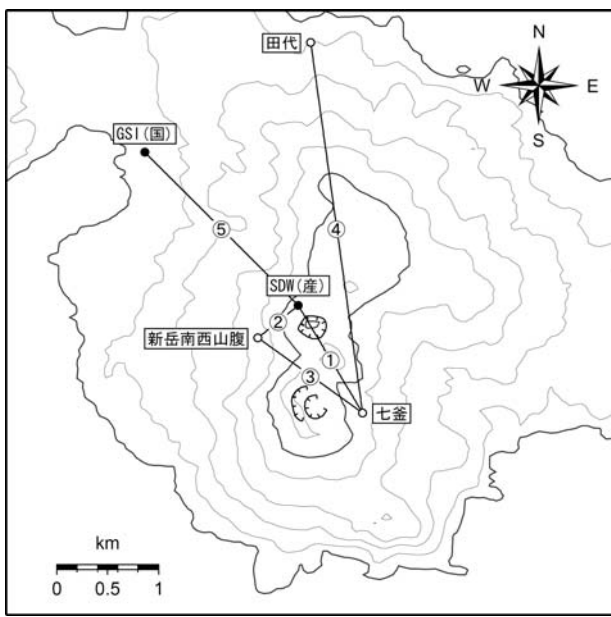
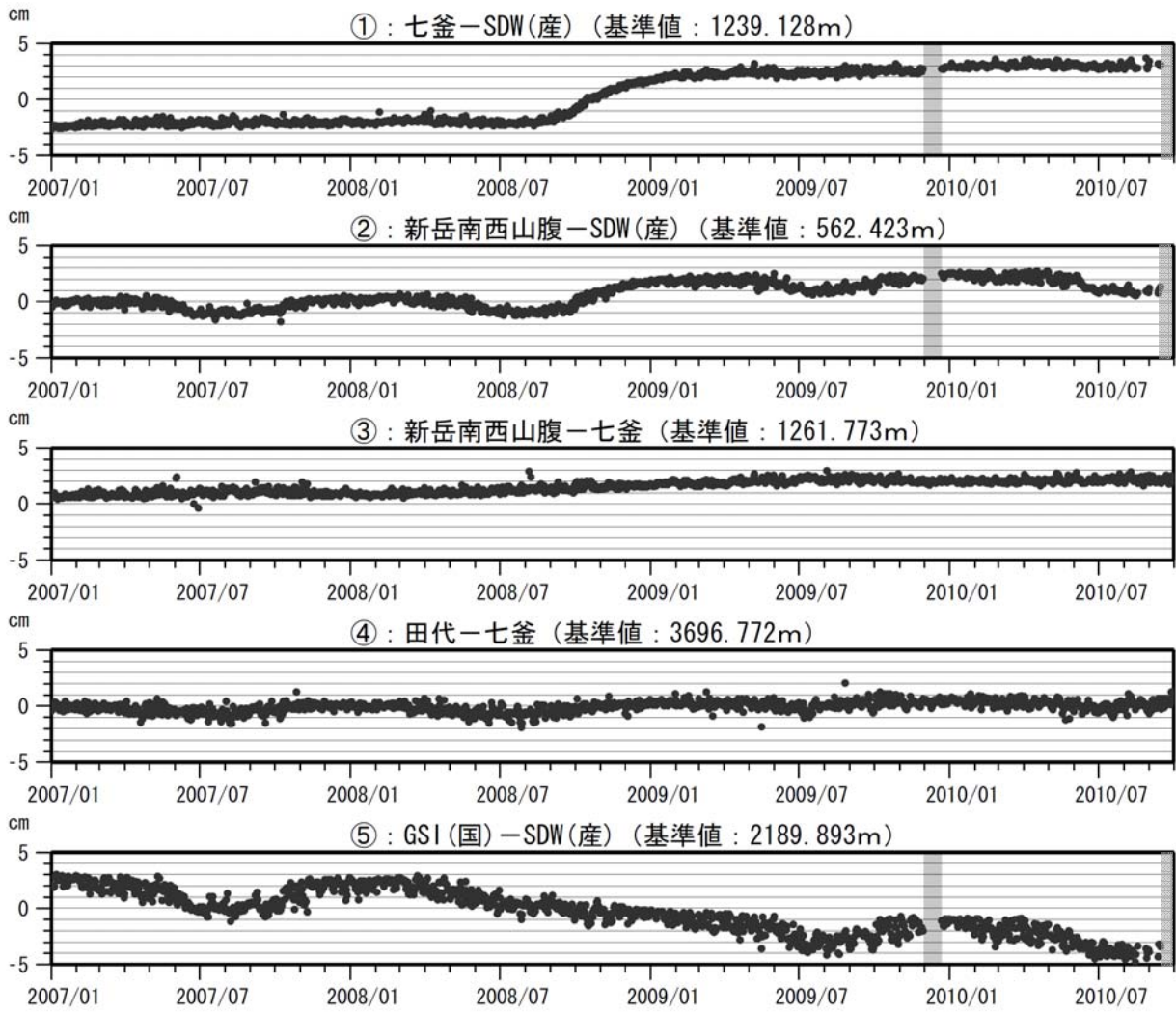


図 2※ 口永良部島 GPS 連続観測による基線長変化 (2007 年 1 月～2010 年 9 月)

小さな白丸は気象庁、小さな黒丸は他機関の観測点位置を示しています。
 灰色部分は観測点障害のため欠測。

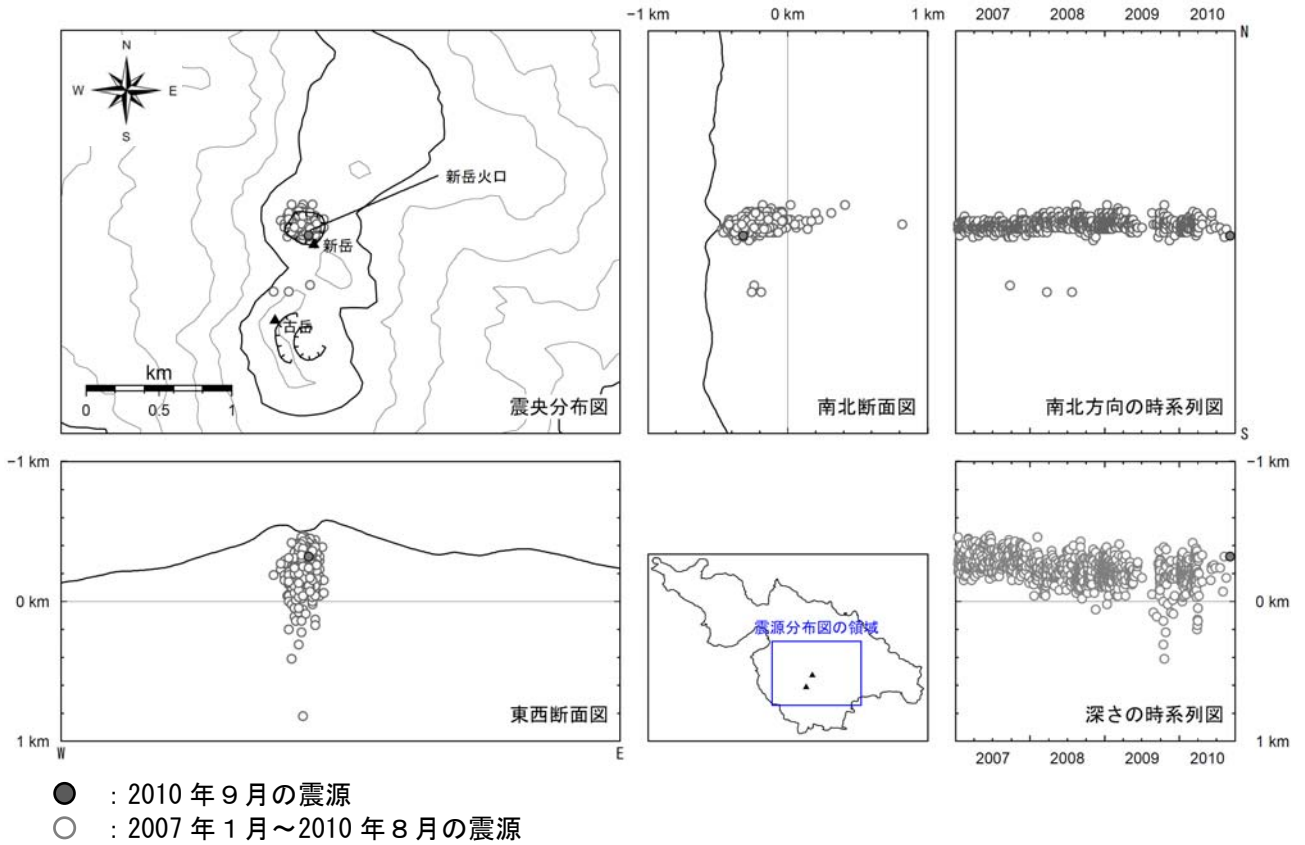


図3※ 口永良部島 震源分布図（2007年1月～2010年9月）
＜9月の状況＞

火山性地震の震源はこれまでと同様、新岳火口直下のごく浅いところでした。

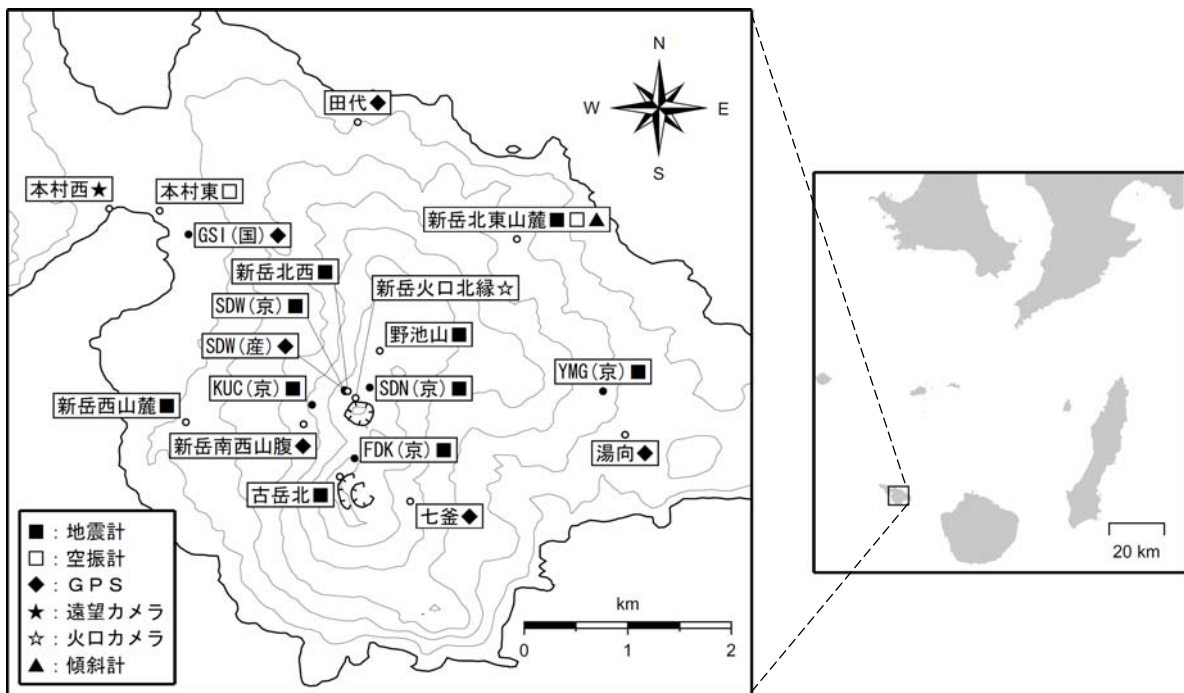


図4 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸は気象庁、小さな黒丸は他機関の観測点位置を示しています。
運用開始前の観測点も含まれます。



図5 口永良部島 観測点位置図
 図中の矢印は撮影方向を示しています。

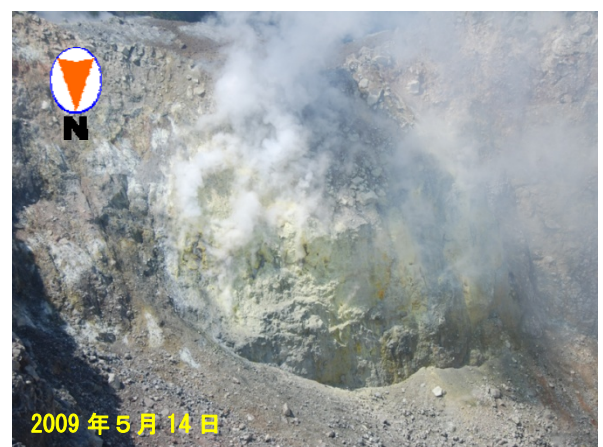
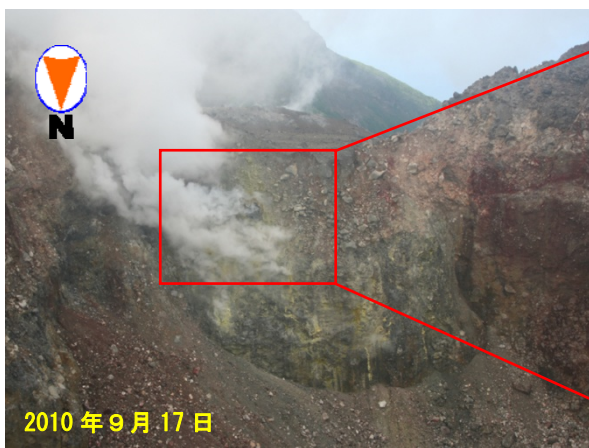


図6 口永良部島 新岳南側火口壁の状況（観測定点6から撮影）
 9月17日に実施した現地調査で、南側火口壁の上部に直径3.5mの噴気孔が形成されているのを確認しました。

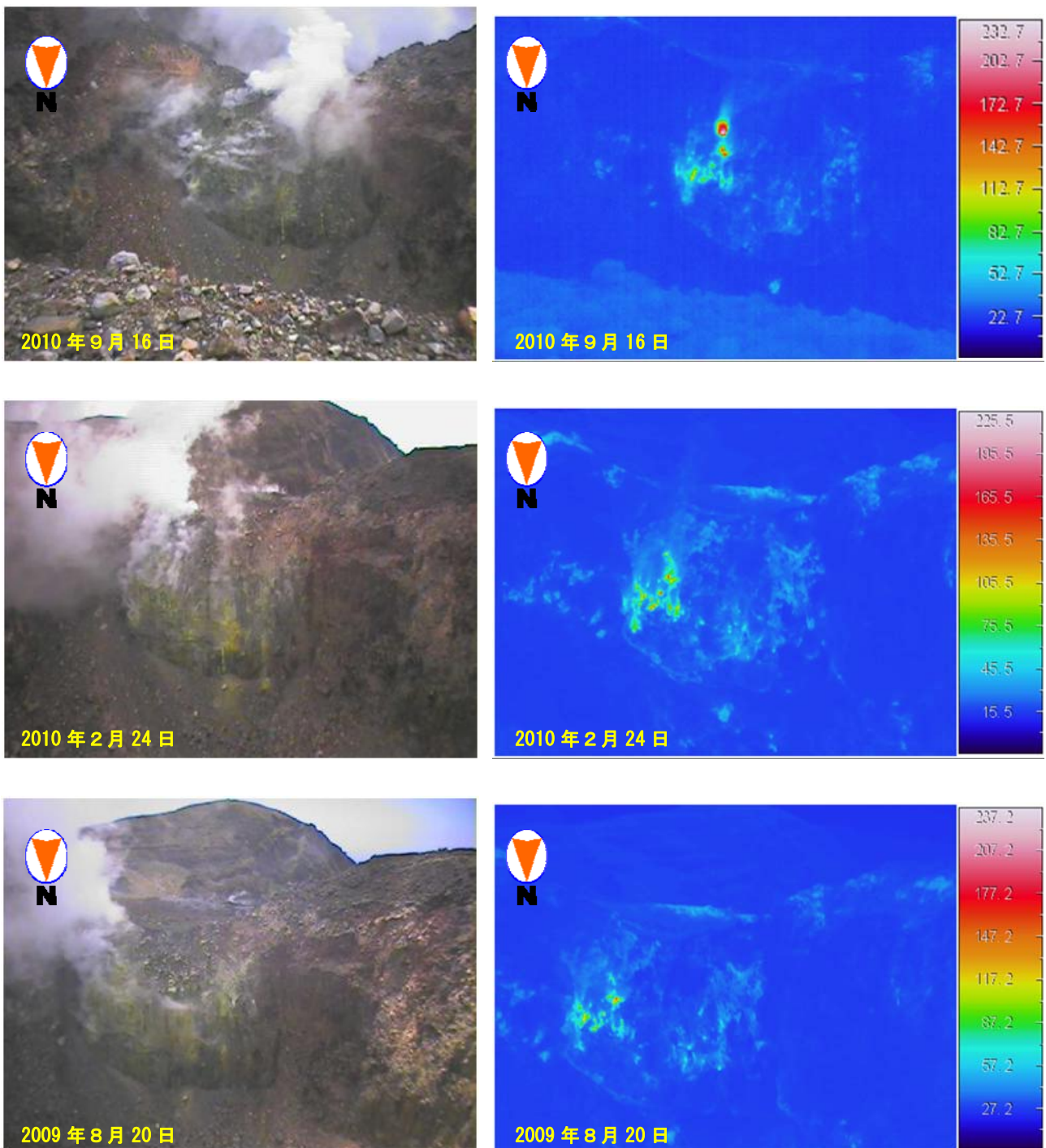


図7 口永良部島 赤外熱映像装置¹⁾による新岳南側火口壁の地表面温度分布(観測定点6から撮影)
 9月16日に実施した現地調査では、これまでの観測(2010年2月24日:144℃、2009年8月20日:
 159℃)と比べて噴気の勢が強くなっており、最高温度も新たに形成された噴気孔付近で227℃と上
 昇していました。

1) 赤外放射温度計は、物体が放射する赤外線を感じて温度を測定する測器で、熱源から離れた場所から測定できる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。

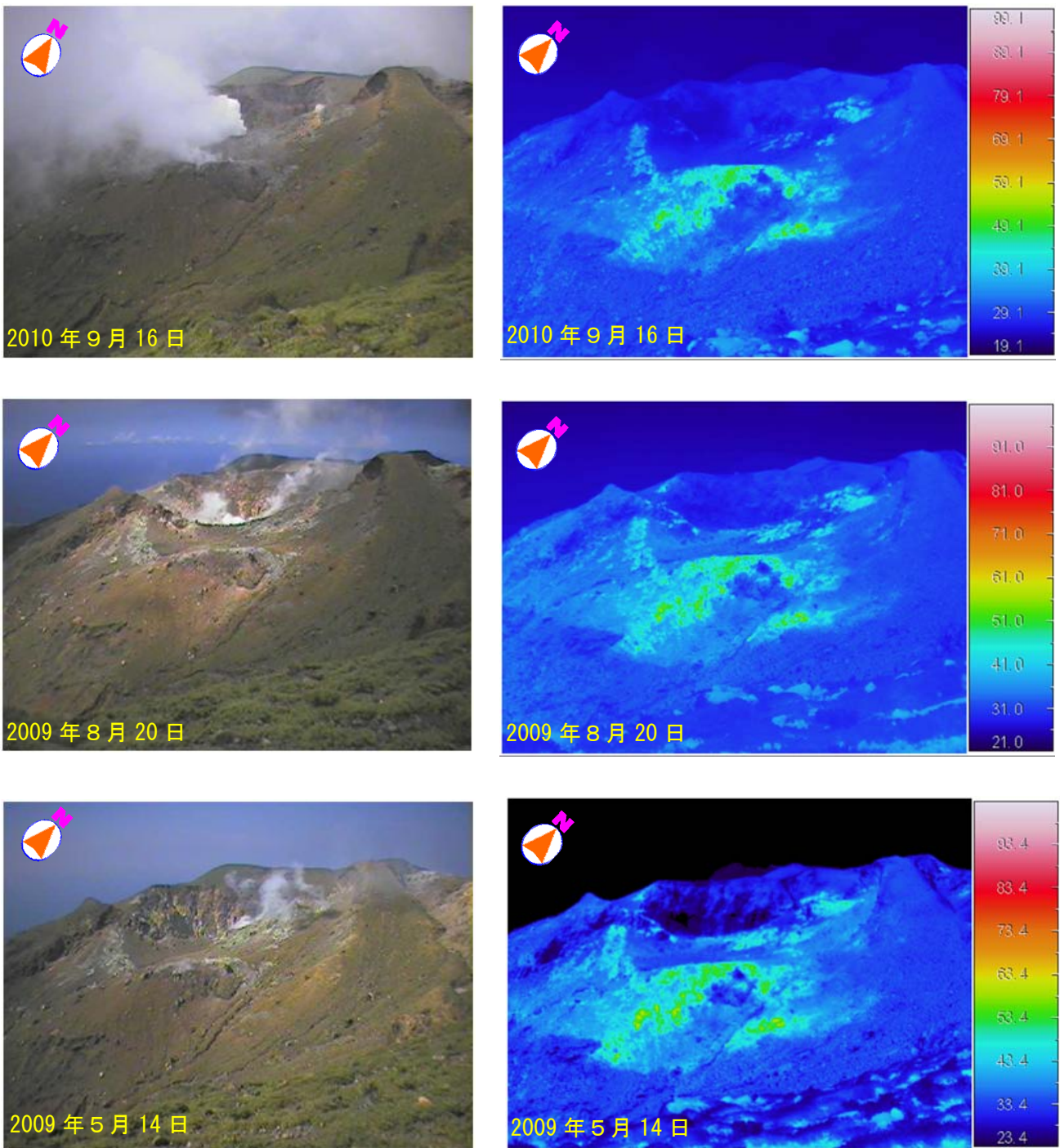


図8 口永良部島 新岳南側火口外の状況と表面温度分布（観測定点3から撮影）
新岳火口南西側噴気地帯の熱異常域の分布に特段の変化は認められませんでした。

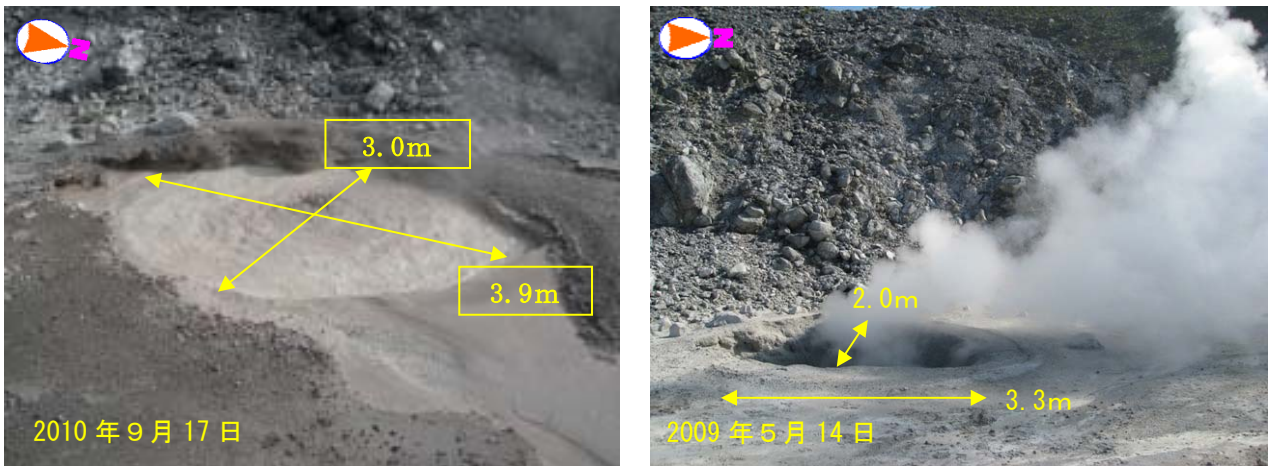


図 9 口永良部島 古岳火口の状況と表面温度分布

前回（2009 年 5 月 14 日）の観測で確認された噴気孔は熱水に満たされ、中央部に噴湯を確認しました。

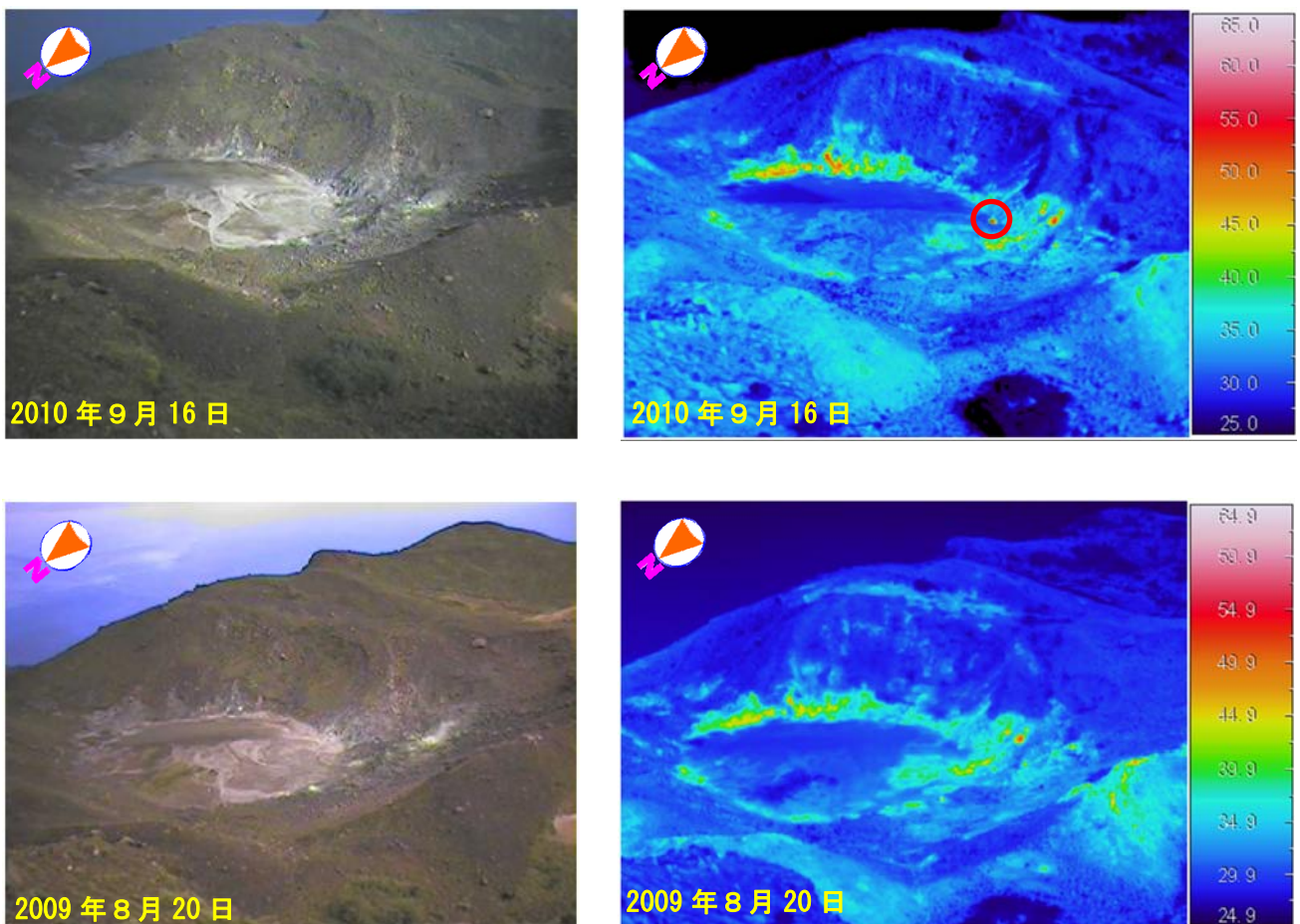


図 10 口永良部島 古岳火口の状況と表面温度分布（観測定点 5 から撮影）

図 9 の熱水に満たされた噴気孔は、赤外熱映像装置でも確認できました（図中○枠）。
 その他は特段の変化は認められませんでした。

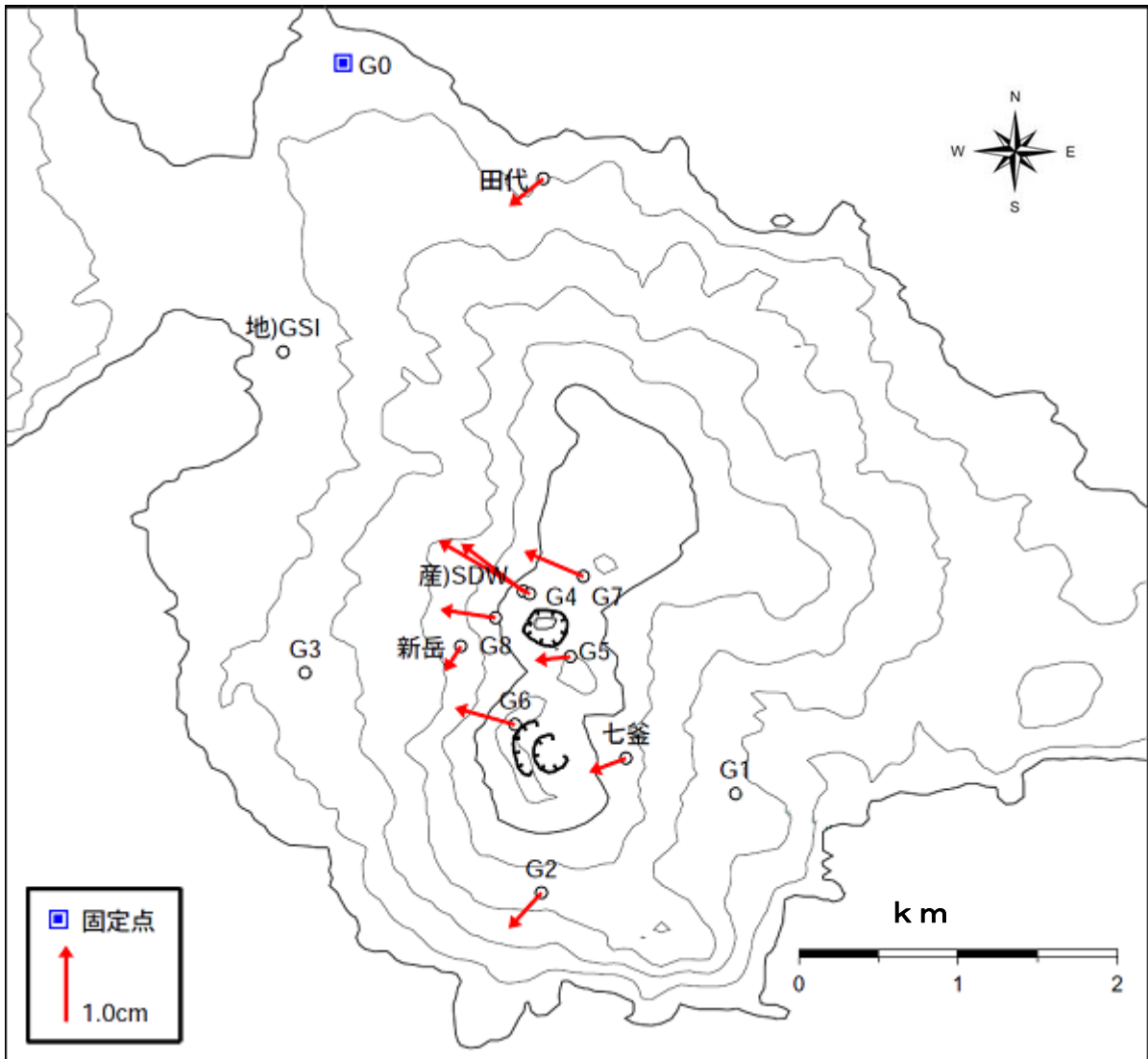


図 11 口永良部島 GPS 繰り返し観測による変位ベクトル（2009 年 5 月～2010 年 9 月）

昨年（2009 年）5 月以降、新岳火口浅部の膨張を示す変化は認められませんでした。

G1 及び G3 は欠測。

この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50m メッシュ（標高）』を使用しています（承認番号 平 20 業使、第 385 号）。